あぐいぶらり旅

石造物を巡る（板山・福住・白沢コース④）

シリーズ 阿久比を歩く ㉓

半蔵行者堂横に立つ“半蔵行者堂標”

いつもの〝相棒〟友人と二人で福住地区の興昌寺へ、「半蔵行者堂標」と「楚山先生墓石」を探しに出掛けた。

興昌寺山門下の西側の一角に、岡戸半蔵をまつる行者堂があり、その右横に「半蔵行者堂標」が立つ。

岡戸半蔵は福住出身で、知多四国八十八カ所霊場を開いた一人である。阿久比風土記の会が編集した『知多四国開創　阿久比出身岡戸半蔵』によれば、半蔵は明治三十六年福住荒古に造られた阿弥陀堂でまつられていた。阿弥陀堂は昭和三十年ころ、東部線の拡張により取り壊されることになり、知多四国十四番札所で縁の深い興昌寺の山門西側に〝半蔵行者堂〟として再建される。堂標もそのときに現在の場所に移転したようだ。

堂標は高さが約一メートル。風化がひどく、頂の突起が削れて四角柱となっている。「明治四十四年三月」と記された文字が読み取れる。

「四角柱の面積の求め方覚えてる？」。私からの突然の質問に友人は、「底面積×高さで求まりますよ」。自信満々に答える。「さすがだね」とほめる。「テレビのクイズ番組に、この手の問題がよく出るので、妻に僕の頭の良さを認識させるため、こっそり勉強してるんですよ」。「じゃあ、球の面積は？」。「台形の面積はばっちりなんですけど。昨日の夜、早く寝てしまって・・・」。この言い訳を岡戸半蔵はどう思うだろうか。

境内を通り、西側の墓地へ進む。「故大村福三郎楚山先生墓」の文字が目立つ大きな墓石を発見。

「大村福三郎楚山」（一八四三～一九〇七）。文化財調査報告書では、尾張藩校明倫堂最後の教授で福住出身と解説される。墓は明治四十一年、親戚や門人により建立。

藩校は江戸時代、藩が経営した藩士の教育を目的とする教育機関。明倫堂の初代督学（校長）は東海市出身の儒学者細井平洲。思わぬことがつながっているものだ。「明倫堂で学んだお侍さんたちは、球の面積は求められるでしょうかね」。「名門明倫堂だよ。地球の面積まで暗記していると思うよ」。

帰り際、半蔵行者堂に手を合わす高齢の女性を見掛ける。甚目寺町から知多四国参りに家族で来たとのこと。私たち二人も並んで手を合わせる。雲行きが怪しく、雨が降りそうになってきたので家路を急いだ。

墓地の中でひときわ目立つ“楚山先生墓石”